

## 田村泰次郎への旅

### —中国山西省陽泉と鈴木泰治の潞城—

尾西 康 充

#### 【要旨】

三重県四日市出身の小説家田村泰次郎と詩人鈴木泰治とが戦時中、一兵士として中国山西省で過ごした場所を訪問する。九月三日は中国全土で対日戦勝六〇周年を祝う記念式典がおこなわれていた。戦争の非道さをあらためて痛感させられた取材旅行の報告である。

#### 序

数多くの戦争小説を創作した田村泰次郎は晩年に至るまで「『戦場』は、私の一生賭けてのテーマである」と語り続けた。彼の戦争小説の精華を集めた『蝗』（一九六五年、新潮社）の「後書」には、戦後二〇年を経てすべてのものが「忘却という分厚い幕のむこう」に次第に距てられて行くのに比べ戦場だけは忘れることがない、と記されている。彼によれば、時間が経つに従って戦場の真実を知りたいという欲求が強まった結果、「素朴な事実の強さよりも、もっと強力なリアリティー」を追求するようになり記憶のなかの「あるがままの戦場よりも、もっと戦場らしい戦場へと、デフォルマション」がおこなわれたという。戦場とはどのような場所であったのか、時系列に沿って個々の事実を積み上げるのではなく、脳裏に焼き付けられた戦場の典型的な光景にデフォルメを加えることによってリアリティーがより強力なものになると考えるのは、泰次郎が歴史家ではなく小説家であったことの証であろう。戦場の体験

でなくとも自分が体験したことを正確に読者に伝えようとするのは難しい。泰次郎の場合、過去を懐かしむといったセンチメンタルなものはない卑怯さ、集団のなかの孤独、生命への慢性的な不安、気ちがいじみた情欲、あらゆる瞬間における獣への安易な変身、戦場にある、そういう一人の兵隊に執拗につきまとうもの」を真剣に追求したいという意欲に支えられていた。通常ではとても理解できない戦場の強迫された心理と行動を端的に示すことにデフォルメが使われており、安易なフィクションや誇張などとは無縁のものであった。

文学の研究は文献資料を扱うことが重んじられる。まず表記の異同をチェックしながら本文を校訂し、掲載誌や書籍の体裁や内容、成立の背景などをまとめた書誌を作成する。そして注釈を付して本文の正確な解釈を試み、作品の影響関係などを明らかにして行く。しかし、近年の新しい研究スタイルである言説研究においては、作品がどのような「語り」によって構成されているかを文学内外の他のジャンルのものと比較したりメディアによる操作を明らかにしたりしながら検証する。たとえば戦争小説であれば、作品に描かれている戦闘が実際にあったかどうかではなく、その作品が書かれた同時代あるいは同地域に共通して見られる「語り」のフレームをさまざまテクストから読みとりそこに異種の「語り」が混入していないか、もしくは相反するベクトルを持った語り

が交錯していないかなどを見極めることによって作品のオリジナルな相を浮かび上がらせる。作者にとってみれば意識的にそう書いたのか、あるいは無意識的であったのか判然としないグレーゾーンにも踏み込んで「語り」の力学を明らかにするのが言説研究である。戦争体験が急速に風化される昨今、どのように戦争の記憶を継承するかという議論は喧しい。体験者の証言を記録すれば済むような話ではなくそれを記録する者の姿勢が問われている。さまざまな内容を持った証言をどのような観点で記録し、どのような方針で編集するかは「語り」の闘争の火線に位置するものであるからだ。

一九四〇年一月、田村泰次郎は召集令状を受け取って独立混成第四旅団独立歩兵第一三大隊第三中隊に配属される。泰次郎と同じ大隊の第二中隊にいたのが三重県桑名市の近藤一氏である。近藤氏は日本・中国・韓国の歴史学者が共同編集した東アジア近現代史『未来をひらく歴史』（高文研）に過去を証言する元日本兵士として登場する。山西省で自ら体験した一般住民に対する虐待や慰安婦の問題、そして沖繩戦での過酷な戦闘を語っている。山中を行軍する兵士を督励するために部隊の中央に裸の女性を歩かせたという泰次郎の小説『裸女のいる隊列』は近藤氏の日撃した光景にほぼ重なること、しかも実際はさらに残酷であったことなどは戦場の非道さを痛感させられる証言である。その他近藤氏に当時の話を尋ねると、泰次郎の小説はどれもほぼ戦場で実際にあった出来事を踏まえて書かれていることが分かる。

本年三月に東京高裁で控訴が棄却された元従軍慰安婦裁判の原告は山西省孟県に住む女性たちで、泰次郎とは大隊が一つ異なる第一四大隊によって戦時性暴力を受けた。現地を訪問し被害女性を支援し続けるグループは、周到的な調査にもとづいた『黄土の村の性暴力―大娘たちの戦争は

終わらない』（創土社）を刊行しビデオも制作した。書籍は石田米子氏と内田知行氏が編者となって孟県での現地聞き取り調査をまとめた報告書に六本の論文を付している。ビデオは池田恵理子氏が撮影・編集・構成を一手に引き受け、今日に至るまで続く被害女性の苦しみを現地で撮影した映像を通して伝えている。他方、前述の近藤氏の戦場体験を記録したのが『ある日本兵の二つの戦場―近藤一の終わらない戦争』（社会評論社）である。内海愛子氏・石田米子氏・加藤修弘氏が編者となって近藤氏の証言を中心にその解説となる論考を付している。

これらのすぐれた証言集を読んでもみると現地で「声」を聞くことがいかに重要なことかを再認識させられる。テクストとして記述される前の「声」そのものにまず耳を傾けることではじめてテクストの構成を真にとらえることができるのではないか。無論その「声」は純粹なものではなくすでに言説の力学が侵入し働いているのだが、それを拾い集めることによってテクストとして加工される以前にあった複数の暴力の所在を明らかにすることができる。たとえば元慰安婦なら彼女の証言を阻んできたのが彼女を旧日本軍の協力者として除け者にした同じ村人や、反革命分子として糾弾し近年まで生活支援をしなかった中国政府であった。旧日本軍による戦時性暴力の被害が一次的なものとするればそれらの暴力は二次的な、しかし二次的とはいえ戦後も長く孤独な生活を強いられて自殺する者まで出した強圧的なものばかりである。現地の声を拾うことによって証言者が口にすることさえできなかったそれらの歴史が次第に分かり始めるのである。とりわけ池田氏のすぐれた論考「田村泰次郎が描いた戦場の性―山西省・日本軍支配下の売春と強姦」（『黄土の村の性暴力』所収）を読むと泰次郎の小説の舞台を訪問してみたいという思いが強くなった。戦後六〇年を迎えた今年、これまで宿願であった『田村

「泰次郎選集」（全五巻）を日本図書センターから上梓できたこともあって、乾燥した黄土高原の夏の酷暑がようやく収まり始めた九月の一日から四泊五日の行程で中国山西省を訪れることにした。

### 一 北京市焦庄戸地道戦址記念館

中部国際空港を一三時に離陸して約三時間、出発が一時間余り遅れた中国国際航空の旅客機は現地時間の一六時に北京国際空港に到着した。

時差は一時間で中国の方が日本よりも遅い。空港の待合室でスルーガイドの中国婦女旅行社の梁吉東氏に迎えてもらい、早速、北京市の郊外にある焦庄戸地道戦址記念館に向かった。空港から約六〇キロの順義区龍湾屯鎮位置にある同館は、北京市発展改革委員会によって盧溝橋、宛平城、北大紅樓などと共に国家発展開発委員会二〇〇四〜〇七年重点建設の

「紅色旅游」風景区として指定されている。国家発展開発委員会は愛国主義教育を強化するために宣伝部、国家旅游局等部門と共同で「全国紅色旅游景区建設計画」を組織し全国一二の地域に重点をおく三〇の「紅色」観光コースを開発して一〇〇余りの愛国教育観光基地の建設を進めている。そのうち今年は抗日戦争六〇周年を記念し、抗日戦の歴史を反映させた「紅色旅游区」の建設に着手し焦庄戸地道戦址記念館の新館がオープンしたのである。

北京五輪に向けた新国際空港や郊外の高層アパート群などの大規模な建設ラッシュが続いており、街の景観を見れば北京市が著しい経済成長を遂げていることが一目で分かる。路傍には牛や馬に荷車を牽かせる農民の姿が見られる一方、木炭車やオート三輪にはじまって最新型のベン

ツやアウディまで自動車の歴史を一所に展示したような壮観である。民族および地域の多様性に加えてこのような経済的格差を抱えてしまうと、歴史の記憶を共有することによってしかナショナルアイデンティティは確保できない。戦後六〇年が経過してにわかに着手された「紅色旅游区」のプランもこのような政府の施策によるものであろう。

空港への到着が遅かったこともあって焦庄戸地道戦址記念館の新館はすでに閉館していたが、旧館および地下の坑道は見学することができた。



写真 1 焦庄戸地道戦址記念館の地下坑道

地下三、四メートルの深さに掘られた地下道は全長一、二キロ、四つの村の約四〇〇戸をつなぐ坑道である。はじめは坑内一・三メートルの高さで大人一名がようやく通り抜けることができるだけの大きさであったが、今は掘られ電燈によって照らされている。日本兵によって見破られにくいように坑道の地上への出口が井戸や飼葉桶、ベッド、竈に隠されていたり、毒ガスや細菌兵器が使われてもそれから逃げられるようにさらに深くパイパスが掘られていたりとさまざま工夫が見られる。

かつてウィーン市中央のシュテファン教会の地下にあるカタコンベを見学したことがある。モーツアルトがコンスタンツェと結婚式を挙げたことで有名なその教会の地下には、何層にもわたって掘り下げられた坑道があり、中世にヨーロッパで大流行したペストによる死者とされる白骨が積み重なるようにして埋葬されていた。ウィーンの地下坑道と北京のそれとはそもそも目的が異なるが、今でも過去の隠された記憶を保存し続けている点では共通するし、そこから死者の叫びが聞こえてくるようであった。

## 二 山西省陽泉（一）―百団大戦記念碑

郊外から市内に戻って北京西駅から二時四〇分発太原行き寝台特急に乗った。北京から保定、石家庄北、陽泉、榆次を経由して太原へと向かう路線の地名は、どれも泰次郎の小説に登場するものばかりである。泰次郎が終戦後に激しい戦闘に巻き込まれたのは保定であったし、出征後すぐに配属されたのは石太線（石家庄―太原）を警備するための旅団であった。寝台車では、四人部屋コンパートメントでエアコンが完備された軟臥に乗った。清潔で乗り心地は上々、翌三時五七分に陽泉駅に到

着するまで安心して休むことができた。深更であったにもかかわらず同駅の改札口には現地ガイドの山西省中国国際旅行社の耿非祥氏が運転手と共に待っていて、すぐに陽泉賓館に連れて行ってくれた。陽泉は良質の無煙炭の産地として有名でありホテルの客室まで窒素酸化物の臭いがした。

翌朝、市内の南西にある獅腦山へ百団大戦の記念碑の見学に出かけた。かつて旧日本軍と八路軍との間で七昼夜にわたって激闘が演じられた同山は今では森林公園になっていて、小雨のなか一、〇〇〇以上ある石段を登って海拔一、一六〇メートルある頂上にたどり着いた。記念碑はオベリスクと横長の碑の二つが建てられていて、いずれも濃霧で先端が霞むほど巨大なものであった。陽泉は正太線（正定―太原、先述の石太線と同じ路線）の中央にあり晋察冀（現在、晋と察は山西省、冀は河北省）と晋察魯豫（現在、魯は山東省、豫は河南省）から攻め込んできた旧日本軍に対して抵抗する頑強な根拠地を形成していた。

一九四〇年八月二〇日夜、八路軍の晋察冀軍区の第二九師団と第一二〇師団は軍本部の指揮を受け、当時旧日本軍の支配下にあった正太線と石家庄西の井陘炭坑との攻略を柱にする作戦を開始した。作戦開始から三日目には八路軍の部隊は民兵を含めて一〇四団（連隊）、四〇万人に達したことから同作戦は百団大戦と呼ばれるようになる。「一本のレーンも残さず、一本の枕木も残さない」の呼び掛けに河北省だけでも一〇万人以上の民衆がこの鉄道破壊に加わったといわれ、八路軍が華北地方でおこなった抗日戦のなかで最も大規模かつ長期的な作戦になった。戦闘は五ヶ月に及びその結果、戦死者は日本側二万余、満州国軍五千余、八路軍一万七千余にも達し、満州鞍山製鉄所の燃料供給源であった井陘炭坑は半年間も採炭不能に陥った。一般市民の主体的な参加があったこ

とを憂慮した旧日本軍はこれ以後「掃揚作戦」「清剿作戦」を企て、住民の虐殺を本格化させた。

それまで過小評価していた八路军に大敗を喫した旧日本軍は劣勢を挽回するために内地で大規模な動員をかけた。現在アジア歴史資料センターで公開されている軍事機密文書のなかにこのときのものがいくつか遺されている。参動一一九一号九六六四号文書「在支部隊補充交代要員派遣可能人員ノ件」(石原莞爾京都師団長発、陸軍大臣東条英機宛、昭和十五年一〇月五日)は一月中旬に第一〇六師団および独立混成第四旅団、独立歩兵第七一大隊の補充交代要員の派遣可能な人員数を具申し、実際これにもとづいて召集がおこなわれている。このとき名前の挙がっている独立混成第四旅団の独立歩兵第一三大隊第三中隊は泰次郎が配属された部隊である。陽泉から南西約一〇〇キロのところにある榆社の治安警備をしていたが、百団大戦の際には八路军によって壊滅的な打撃を被っていた。独混四旅副密第一〇七号「陸軍秘密書類焼却の件報告」(片山省太郎独立混成第四旅団長発、東条英機陸軍大臣宛、昭和十五年二月八日)は同隊がいかに混乱して敗走したかを示す文書である。一九四〇年九月二十四日、陸軍省の軍事秘密書類と八九式重擲彈筒射表(八九式榴彈)一部を辻本松三郎曹長が焼却したという。この文書によれば、その顛末は以下の通りである。

九月二三日二二時頃ヨリ榆社警備隊(陸軍大尉藤本芳樹以下九七名)ハ約四千(山砲二、追撃砲八、重機関銃六、軽機関銃三〇余ヲ有ス)ノ優勢ナル敵ノ包圍攻撃ヲ受ケ以来中隊長以下決死勇戦ナル応戦ニ努メ敵ニ多大ノ損害ヲ与ヘタルモ兵力我ニ数十倍ヲ有スル敵ハ依然頑強ニ抵抗攻撃シ来リ翌二四日午後二至リ我軍奮戦力闘ノ効モナク將兵敵彈ニ相ヒ次テ殪レ彈藥又欠乏スルニ至レリ、此ノ時敵ハ城壁

近クニ迫リ山砲迫撃砲ノ射撃益々猛烈ヲ極メ之レカ砲彈ト共ニ爆薬ニ依リ陣地防衛施設ノ半ハ崩壊セラレ敵一挙ニ我ニ迫シ其一部ハ遂ニ陣内ニ侵入ス、此処ニ於テ中隊ハ僅少ナル予備隊ヲ以テ肉弾戦ヲ演シツ、之ヲ撃退スル事三度ニ及ヘリ然ルニ衆寡敵セス遂ニ陣地ノ一角奪取サル、敵ノ一部既ニ陣内ニ入リシヲ知リタル中隊長ハ愈々警備隊ノ全滅ヲ覚悟シ暗号書始メ本射表等重要書類ノ保全期ス能ハサルヲ虞レ九月二十四日二〇時頃暗号書ト共ニ本射表ヲ焼却ヲ決シ此レヲ辻本曹長ニ命ス、中隊長ハ之ニ先タチ重要書類ノ焼却スル旨大隊長池邊中佐ニ電報ヲ以テ報告シアリ

焼却ノ命受ケタル辻本曹長ハ事務室ニ到リ暗号書並ニ本射表ヲ保管箱ヨリ取出シ石油ヲ振りカケ燐寸ニ依リ点火、延焼中ハ敵ニ監視ヲシ完全ニ焼却シ終リタルヲ確メ更ニ灰ヲ両足ニテ踏ミ後此ノ旨中隊長ニ報告セリ

百団大戦時、榆社を警備していた第三中隊九七名は重火器を持った四、〇〇〇名の八路军に包圍され潰走を余儀なくされた。その際、敵の手に渡らないように暗号書と射表を焼却したという。射表とは狙った距離に砲弾を落とすために角度と火薬をどれだけの量にすればよいかを気温や湿度、風向、風速の条件の下で計算した表である。武器が不足していた八路军は旧日本軍のものを奪って使うことにしていたので、もし暗号表や射表を八路军が入手すれば旧日本軍の配置や武装を知られ大きな打撃を受けることになる。そこで機密情報の管理には神経をとがらせていたのだが、この報告を受けた軍本部は「前述如キ状況下ニ於テ実施セル該処置ハ状況真ニ已ムヲ得サルモノト認め処分セス」としている。このように壊滅的な打撃を被っていた第三中隊に泰次郎は配属されたのである。配属された当時の模様をつぎのように小説に描写している。

曾根平吉が山西省の太行山脈の中に駐留してゐる野戦部隊で独立混成第四旅団の独立歩兵第一三大隊補充要員として大陸に渡ったのは昭和一五年の秋であった。その頃石太鉄路一帯を警備してゐた旧日本軍は中共軍の所謂百団大戦と称する反攻によつて、相当の損害を出した直後だった。曾根の配属になつた中隊も、楡社といふところで全滅同様の打撃を受けて、そこから十里ほどの遼東といふ大隊本部のある県城まで生き残つた僅か三十数名が引揚げてきて、またいくらも過ぎないときだった。辻本曹長といふのが戦死した隊長の首を国旗につつんで、背中に負つて帰つたのであるが、曹長はその隊長の血の染んだ国旗をいつまでも大切に居室に飾つてゐるのを、曾根たち新兵は不思議に思つて眺めてゐたことを思ひだした。

（「渇く日日」）

右の一節が含まれた「渇く日日」は文芸誌「饗宴」第四号（一九四六年一〇月、日本書院）に掲載された小説で、復員直後の泰次郎がそのときの感慨を素直に表現した傑作である。前掲の陸軍文書と照らし合わせると「辻本曹長」という名前に至るまで史実に近い内容であつたことが分かる。泰次郎は「肉体作家」としてのイメージが強すぎたためにつねに何かいかがわしさがつきまとうのであるが、彼の戦争小説は実際に自分が戦場で体験したことにもとづいて書かれるケースが多かつた。フィクションを用いなくとも戦場をありのままに描けば、それだけで人間の想像を絶した世界が表現できる。「戦場は人間の住むところではなく、人間以外のものの生きる場所である」ために、それをありのままに描くことは実は至難の技といえる。だからこそ泰次郎は「かつての戦場で、自分が人間以外のものであつたことをみずから認めるために、そのときの原体験の忠実な表現者でなければならぬ」と自戒したのであつた<sup>3)</sup>。

### 三 山西省陽泉（2）——旧日本軍軍門址他

獅腦山の見学を終えて陽泉市内に戻ってきた。山西省第三の都市陽泉は良質の無煙炭が採れることで有名である。同省の石炭埋蔵量は全国総量の三分の一に当たる二、六一二億トンに達し、その支配を狙つた旧日本軍と八路军との間で激しい戦闘があつた。現代中国で資本主義経済が急速に進むなか安全対策が不十分のまま一攫千金を狙つて採鉱を強行する炭鉱主がおり、同省では今年七月までにガス爆発など九〇件の炭鉱事故が発生し三二六名が犠牲になつてゐる。炭鉱事故の続出に対処する措置として省政府は昨年、事故を起こした炭鉱主に対して犠牲者の各遺族に二〇万元を賠償することを義務づけ、今年も死亡者一人につき一〇〇万元（約一、四〇〇万円）の罰金を科すことを決めた。しかし郊外に住む貧しい農民を低賃金で雇い劣悪な環境で労働させ、行政官僚を収賄し違法操業を続けているケースが多いようである。

陽泉は独立混成第四旅団司令部がおかれた都市であり、泰次郎の読者には「肉体の悪魔」（「世界文化」第一巻八号、一九四六年九月）の舞台として知られてゐる。「肉体の悪魔」は、泰次郎が旅団司令部営外の街中にあつた公館で元八路军軍の俘虏である宣撫班員たちと一緒に起居してゐた頃のエピソードにもとづいて創作されている。北支方面軍第一軍司令部の情報部調査班長をしていた美術家の洲之内徹とはそこで知り合つた。砲火の交わる前線を離れ旅団本部附の勤務にならなければ、そのような体験はできなかったわけだが、泰次郎の転属を薦めたのは丹羽文雄であつた。田村泰次郎宛丹羽文雄書簡（一九四一年二月一三日付、三重県立図書館所蔵）によれば、前夜に帝国ホテルで支那派遣軍報道部長から陸軍報道部長へと昇進した馬淵報道部長の歓迎会が開かれた。わざわざ

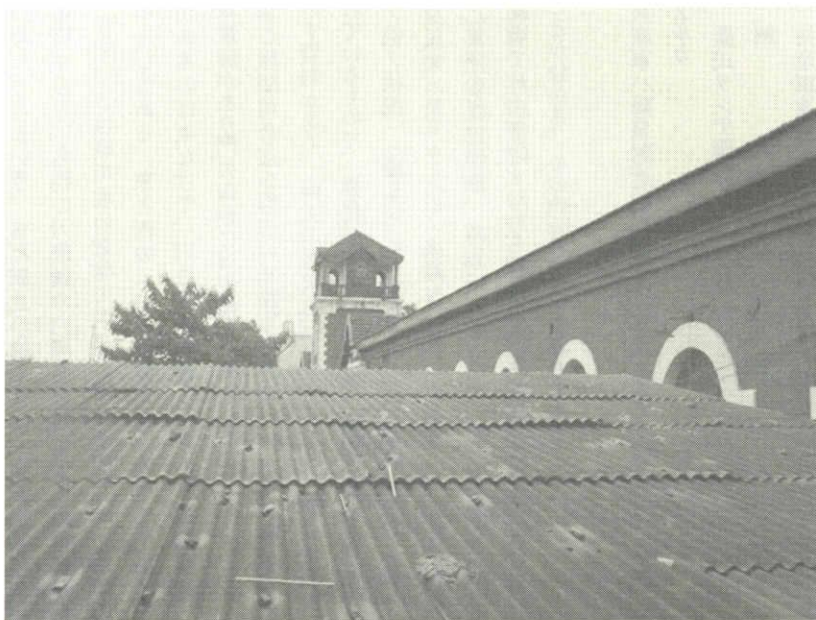


写真2 旧日本軍が占領していた頃の陽泉駅の旧駅舎

ざ丹羽がそこに出かけて行き、田村の配属の件を彼に直接依頼したとある。ちなみに泰次郎は一九四三年八月一日伍長に任命され、四四年八月一日軍曹に任命、そのまま敗戦を迎えている。陽泉市内で旧日本軍に關係のある建物を探した。九〇年代以降の改革



写真3 東営盤の旧日本軍門址

開放路線の影響を受け、古い建物は次々に壊され新しいものに替わっていったが、もう今は使用されていない陽泉駅の旧駅舎を見つけることができた。この駅舎は旧日本軍が陽泉占領していた時代から一九八九年まで使わ

れていたものだという。また駅北の通りには「東営盤社区便民市場」という市場があり、名物の刀削麵や白酒を求めて多くの市民が集まっていた。「営盤」とは駐屯地の意味で旧日本軍が支配していた頃の名残が町の名前としてある。東と西の二つの営盤があったそうであるが、当時の遺構があるのは東だけで、旧日本軍が建てたという軍門が遺っていた。当初は鉄扉があり門の両側には守衛がいたという。

陽泉の旅団司令部が周辺の八路军根拠地にかに神経をとがらせていたかを示す資料がある。前掲の資料と同じようにアジア歴史資料センターで公開されているもので、極秘減資料「石太線ヲ襲撃セル共産党軍ノ対民衆工作其ノ他ノ状況」(陽泉附近ニ蟠踞中ノ一二九師ガ民衆ニ対シテ為シタル事項及民衆ニ語りタル言ノ蒐録其ノ他)である(註)。「片山部隊参謀部調整、乙集団参謀部印刷、昭和十五年九月一日」と記されており、百団大戦の緒戦で片山部隊すなわち独立混成第四旅団によって作成されたものであることが分かる。その内容は以下の通りである。

一、共産軍ハ陽泉附近駐兵間支那住民ニ対シ何ヲ為シタルヤ、又何ヲ言ヒタルカ

1. 農民ヲシテ確實ニ宣伝員タラシメントセシモノノ如シ

例

共産軍進出ト同時ニ各村々長又ハ保衛団員等ヲ拉致シ左ノ如キ各  
項ヲシテ日本軍ニ対スル宣伝ニ使用セントシタルモノト認ム

(イ) 我共産軍ノ後方ニハ日本人約四百名アリ吾等ハ特別ニ彼等  
ヲ優待シアリ。又彼等日本人ノ為ニ特ニ白米ノ多数有セリト。

(ロ) 獅腦山上ニハ五支里ノ射撃能力ヲ有スル大砲ヲ設置セリト

(ハ) 五日間(二一日ヨリ)ハ絶対ニ獅腦山ヨリ後退セスト

(ニ) 糧食ハ非常ニ豊富ニ所有セリト

(ホ) 彈薬ヲ豊富ニ所有セリ

(ハ) 支那民衆ニ対シテモ非常ニ鄭重ナリタリ等ト拉致セラレタル  
後逃走シ来リタル農民ノ言ハ大半同様ナル報告ヲナシタリ

2. 支那民衆ニ対シ明ラカニ共産軍進出ノ目的ヲ明示セリ。

例

拉致セル農民或ハ各村々民ニ対シ士兵ヲシテ左ノ如ク宣伝セシメ  
タリ。

(イ) 吾軍今回ノ進出使命ハ北京以南河北山西ノ各鉄道ヲ完全ニ  
破壊スルト共ニ軍管理工場ノ奪取破壊ニアリテ何等民衆ニ  
対シ迷惑ヲ及ボサ、ルニ付安心スルト共ニ民衆ハ抗日戦ノ  
タメニ協力スヘシト

(ロ) 京漢線モ大半ハ破壊セラレタリ、又同浦線モ東路線モ全ク  
破壊セリ……等々

3. 共産軍ノ農民ニ対シ実施セル事實行為

(1) 抗日戦ノ名ヲ以テ相当多数各村ニ対シ糧秣徵発ヲナシタリ

(之ニ対シテハ応召セサリシ愛護村モ有リタルカ如シ)

(2) 彈薬糧秣傷病兵ノ輸送ハ悉ク農民ヲ使役セリ。

(之ニ対シテハ何等ノ報酬モナシアラズ)

(3) 糧秣不足ノタメ敵軍駐留地ノ農作物ハ彼等ニ依リ其ノ大半ハ  
荒ラサレタリ

(4) 彼等駐兵地各村ニハ七、七、三周年紀念ノ宣伝ビラヲ相当数  
散布セリ

(5) 部隊名ヲ農民ニ対シ嘗テ無キ程ニ厳秘ニ附シタリ

4. 共産軍ノ将来ニ対スル言明(農民ニ対シ)我等ハ今回ノ企図ハ大



半達セラレタルモ未ダ完全ナラズ

例へ我等後退スルモ二〇日以内ニハ必ズ再ビ攻撃シ来ルヘシ、依而各村ニ於テハ糧秣等充分集結シ置クヘシ……ト（農民ノ言、密偵報）

二、共産軍ハ何ヲ恐レタルヤ

(一) 何カ苦痛ナリシヤ

(イ) 糧秣ノ欠乏

三日間ハ各自携帯シアリタルガ如キモ其ノ後ハ飢餓ト戦ヒタルガ如シ

(ロ) 降雨ト宿泊ニ欠乏

降雨ニハ甚ダシク弱リタルガ如ク発病者多数アリタリト

(ハ) 日軍ノ飛行機

日軍飛行機ニハ極度ニ恐レタルモノ、如ク飛行機ノ攻撃ノ機会ニ逃亡ノ機ヲ窺ヒタルモノモアリタルカ如シ

(ニ) 靴ノ欠乏

敵軍士兵ノ大半ハ草鞋ヲ使用シタルカ如キモ之ガ代用ナキタメ多クハ素足ニテ徒歩シアリタリト

(2) 何ガ不平ナリシヤ（幹部ニ対シ）

(イ) 言語不通ニ対スル不平

幹部ハ概ネ四川省人多キタメ言語ノ不通ヲ洩シタル兵アリ

(ロ) 其ノ他不詳

三、何故ニ陽泉ヲ攻撃セサリシヤ出来サリシヤ

(1) 陽泉ニハ太原方面ニ補充セラレル士兵約二千名近ク下車セリ……トノ言支那人間ニ有リタリ

此ノ兵力ヲ恐レタルナランカ？ 嘗テ農民ニ対シ敵兵ガ陽泉ニハ三千位ノ兵力ガ居ルカト質問シタル事アリ

(2) 軍管理第三工場ノ營業継続ハ敵ヲシテ日軍ノ数量ヲ過大視セシメタルカ如シ、農民ニ対シ第三工場ノ警備兵ヲ再三質問セリト

四、彼等ノ企図遂行ヲ不十分ナラシメタル事項

(1) 飛行機ニ対スル恐怖

(2) 陽泉ニ対スル二一日以後ノ情報蒐集不可能

（敵ハ陽泉ニ対スル情報蒐集ニハ相当努力シ小陽泉大陽泉義東溝附近迄モ便衣ヲ派シタルモ完全ナル成果ヲ挙げ得サリシガ如シ）

五、事前ニ攻撃ノ徵候トシテ認メラレシ事項

(1) 七、七紀念日ノ前後敵側ノ共産党工作ガ治安地ニ対シ積極的ナリシ事

(2) 其ノ他不明

予想以上の頑強な抵抗を受けた旅団は至急その対策を準備するための情報を集めている。八路军に多くの農民が協力したことを憂慮しそれ以後は情報戦、すなわち敵軍を誹謗し自軍に有利な情報を流して民心を惹きつけるための戦いに力を注ぐ。その要員として泰次郎は司令部に呼ばれ情報戦対策の宣撫班員となって劇団を興し公演を催したのである。

#### 四 山西省潞城市（1）—鈴木泰治の戦没地

陽泉での見学を一三時までに終え、午後は三〇〇キロ南の潞城市に向かった。三〇〇キロといっても直線距離での数字で、太行山脈の峰伝いに走る国道二〇七号線の実際の距離はそれをはるかに超えるものである。

石炭を満載した大型のトラックが数珠繋ぎに往来するために道路は激しく傷んでいて安全運転には細心の注意が必要であり、しかも道中、いつ作業が終わるのかさえ知らされない道路工事の現場や土砂崩れが放置されたままの場所が五ヶ所もあって、合計八時間も要してようやく二一時に、当日宿泊する予定の天脊賓館に到着した。路城市に向かった理由は、泰次郎とは旧制富田中学校（現三重県立四日市高校）の同級生であったプロレタリア詩人鈴木泰治が同地で戦死したとされており、現地をぜひ見学しなさやかながらも天折した詩人の供養をしようと思ったからである<sup>③</sup>。輜重兵をしていた泰治も国道二〇七号線を通ったと思う。同線は昔からある省内の主要幹線道路で、八路軍最大の秘密武器工場であった黎城県の黄崖洞を経由するために旧日本軍と八路軍とがその支配をめぐって激しく衝突した。

富田中学卒業後、泰治は大阪外語学校独逸語科に在学中、マルクス主義の影響を受け共産青年同盟員になり三年生の一月に検挙される。不起訴処分になったものの放校処分となって一時故郷に戻るが文学の志を捨てることができずに上京し、新井徹や小熊秀雄、遠地輝武らと共に「詩精神」を創刊、プロレタリア詩を書き続ける。しかし蘆溝橋事件直後に応召し京都第一六師団輜重兵第一六連隊に入隊して中国山西省に出征、一九三八年三月一六日に路城市で戦死した。享年二六。検挙されるまで彼は共産党のテーゼに従った激烈な階級闘争の詩を創作していたが、そのなかの「凱旋」という反戦詩は中国からの帰還兵の視点を借りて、日本の労働者や農民が戦う相手は中国の同じ労働者や農民ではなく両者は連帯してそれぞれの国の資本家や地主を相手にして闘うべきであると訴えている（「大阪ノ旗」創刊号、一九三二年八月）。思想犯としての前科もあって輜重兵に配属になっていたと思われるし、隊内でも憲兵の監

視が付けられていただろう。侵略戦争には決して加担するつもりはなかった彼がどのような心境で出征したのか、その手がかりを得るために彼が戦死した現地を一目見てみたかったのである。

翌朝、ホテルの従業員に泰治が戦死した場所とされる「神大村」はどこにあるのかを尋ねてみた。ところがそんな名前の村はないという返事であった。軍の資料には「神大村」と記載されていたし、遺族もその地名を伝えられている。もう一度尋ねてみると、「神大村」ではなく「神頭村」か「神泉村」ならある、その「神頭村」はかつて旧日本軍が支配していたことでよく知られているという。ガイドの梁氏と歌氏によれば、「頭」は簡体字の「大」でありおそらく「大」と勘違いしたのでらうというのだが、簡体字の使用は一九五六年からなので泰治が戦死した頃に

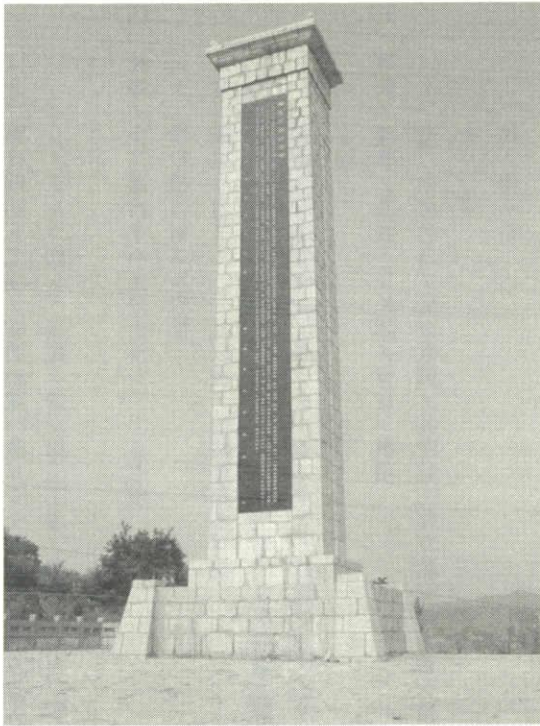


写真4 路城建神頭之戦記念碑

はその話は当てはまらないように思われた。しかし「神大村」がない以上「神頭村」の可能性が高いわけで早速そこに出かけてみることにした。

路城市中央から北東約一〇キロに微子鎮神頭村がある。石炭を燃やす酸っぱい臭いがこの町でも充滿しており、石炭を満載した巨大なトラックが早朝から往来する。二人組の青年がヘルメットを被らずにスピードを上げる。泰治の甥に当たる四日市室山の法蔵寺住職鈴木晃氏によれば、泰治の部隊は谷間の道を進んでいるときに両側の山から激しい銃撃を受け全滅した。泰治の遺体を收容することもできず、実家に帰ってきた遺骨箱のなかには何も入っていなかったという。

車を走らせて約二〇分、ようやく神頭村に到着した。郊外の静かな農村で住民はみな農作業に出かけていてひっそりとしている。戦争を知る者がいないかどうか、残っている数名の村人に尋ねてみると、丘の上の記念碑を見に行けという。指示に従ってその場所に行くとオベリスクと廟がある。碑文の正面には「路城建神頭之戦記念碑」と書かれており、裏面には一九三八年三月一七日に旧日本軍に村人が虐殺されたとある。その日は泰治が戦死した翌日でその偶然の一致に驚いてガイドに碑文を訳してもらうと、三月一六日、路城を出発し南西の長治に進んでいた旧日本軍に対して潜伏していた八路军が九方面から攻撃し日本側一、五〇〇名、中国側二二〇名の戦死者が出た。翌日、すでに長治に達していた旧日本軍が急遽戻ってきて村民のなかに八路军の協力者がいたとして報復をおこなった。村人三七〇名の内一三七名（男性八九名、女性四八名）が虐殺され六世帯二名は家族全員死亡、銃剣で殺された者八二名、生き埋めにされた者一五名、焼死した者四〇名、焼かれた部屋七六一室、破壊された住居四三戸に上ったという。

## 五 山西省路城市（2）—秦春炎氏の取材

この村であったという虐殺の歴史を知って、泰治の供養をしようという当初の目的は吹き飛んでしまった。当日の様子を知る古老がいないかガイドに探してもらったところ、今でも二人存命ということである。その内の一人秦春炎さんに話を伺うことができた。一九二六年四月生まれの秦さんは今年七九歳、当時のいきさつをよく覚えておられた。一九三八年一月一九日頃から旧日本軍が一八キロ北の黎城県から進駐してきた。黎城から長治に向かう道は神頭村を通る道路だけで、黎城と神頭村との間にある東洋関で激闘があった。三月一六日、旧日本軍は長治への侵攻を目指して移動していたが、その最後尾の部隊が神頭村を過ぎようとしたとき潜伏していた八路军が一斉に蜂起した。朝食時から夕食時まで続いた戦闘ではヤオトン（黄土高原特有の横穴式住居）のなかに入って手榴弾を投げていた旧日本軍兵士もいたが最後は全滅した。秦さんによれば最後尾の部隊というのは兵士の食料や生活用品を積んだ馬車のグループであったという。それは泰治の輜重部隊であったと思われる。輜重兵は武装もしていなかったというが進軍する兵団の最後尾でいつも馬の世話をしながら山道に難渋させられていたにちがいない。

推定一、五〇〇名とされる死者の報復に旧日本軍は戻ってきて翌日村で虐殺をおこなう。当時一三歳であった秦さんは偶然山に逃げることでできたが、足の悪かった母は銃剣で突き殺され祖母は石で撲殺され、兄嫁は井戸に投身自殺したという。秦さんは逃げる途中、旧日本軍がヤオトンの入り口を藁でふさいで火を付け、そこに逃げ込んでいた村民を焼き殺す光景を目撃している。おそらく話の内容が残酷すぎるものであったらう、ガイドの耿さんは内容のほとんどを通訳してくれなかった。

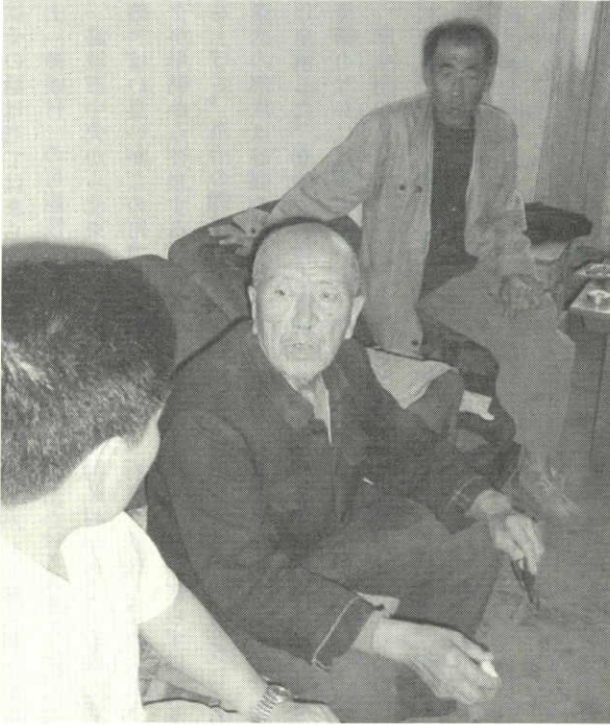


写真5 秦春炎氏に取材（向こう側は二男）

しかし会話の雰囲気から大要を察することができた。六〇年が経過してもなお心の傷は少しも癒えず秦さんは当時のいきさつを話しながら、涙をこぼした。それを聞いている私たちも涙を流して戦争の非道さを嘯みしめた。

思いつく限りの暴行を働いた「日本鬼子」のなかにも決して戦争に賛成していなかった人間がいた、馬車の部隊にいてこの地で戦死した詩人は反戦詩を書き検挙され、軍隊のなかでも憲兵に監視されながら兵団の最後尾を歩かされていた、と私は話した。すると秦さんはそのことはよく分かっていると応えてくれた。秦さんによれば、自分が軍に徴発され



写真6 秦氏と二男夫妻

て黎城に道路工事に行っているときに病気になった、すると工事現場の班長は日本から持ってきた食料や菓子をくれ、しかも自動車に乗せて村まで連れて帰ってくれた。いつ八路軍が来襲するかわからないのに、明日もまた来るよと優しくいつてくれたという。まさか秦さんがこのような理解を示してくれるとは思っていなかったため、この話を伺って再び驚かされた。

現在秦さんは二男夫婦と一緒に生活している。取材を終えて帰る際、長い棹を使って棗の樹から実を落とし、自動車に乗り込む私たちに渡してくれた。ちょうど農家の庭先に棗や胡桃が実る時季であった。その日

長治を經由して太原へ行きそこで宿泊、その後列車で北京に戻ってもう一泊し日本に帰った。今でも癒えることのない悲しみを日本人に必ず伝えますという泰さんとの約束を果たすために、帰国して早々複数の誌紙に取材記事を投稿し、そして本稿をまとめた次第である。さらに鈴木晃氏に依頼して泰治の生家法蔵寺で、神頭村で戦死した泰治たち日本兵を含め虐殺された村民一三七名の供養をおこなってもらえるようにした。

私が訪れた数日間中国では抗日戦勝六〇周年を記念する多くの式典が開かれていたが、私を日本人と知って顔色を変える人は泰さんを含め一人もいなかった。それに比べ「反日デモ」の過大な報道を流して両国の反目を過剰に煽る日本社会の浅ましきには呆れてしまふ。泰次郎は「いかなる大義名分のある戦争も、私は拒否する。正義の戦争というものは、理論上は成立するかも知れないが、人間の名において、私はどのような戦争もみとめることはできない」と語った<sup>(6)</sup>。「人間の名」において戦争を拒否すること、それが戦争の記憶を継承する理由である。

### 註

本文中の田村泰次郎の作品は『田村泰次郎選集』全五巻（日本図書センター）から引用している。本取材に同行して下さった中国婦女旅行社の梁吉東氏および山西省中国国際旅行社の耿非祥氏には重ねてお礼申し上げます。

- (1) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:04122470600、陸軍省陸支密大日記S15-106-201
- (2) JACAR Ref:04122793900、陸軍省陸支密大日記S16-17-40
- (3) 「戦争と私 戦争文学のもう一つの眼」(「朝日新聞」一九六五年二月二四日夕刊)
- (4) JACAR Ref: C04122339700、陸軍省陸支密大日記S15-94-189
- (5) 鈴木泰治の作品と伝記に関しては岡村洋子と共編書『プロレタリア詩人

鈴木泰治 作品と生涯』(二〇〇三年、和泉書院) をご覧下さい。  
(6) 前掲(3)と同じ。

### 附記

アジア歴史資料センターの「鉄道軍事輸送ニ関スル件通牒」(林一造発、川原直一陸軍省副官宛、第一鉄道輸送司令官昭和十五年一月三〇日)は、独立混成第四旅団諸隊の輸送計画が通達されている。これを見れば同旅団に所属する独立歩兵第一、一三、一四、一五大隊および砲兵隊、工兵隊、通信隊が輸送されたスケジュールが分かる。泰次郎よりも一ヶ月遅く出征した近藤一氏を含む第一三大隊は将校七名、下士官および兵九二九名が客車一三両に分かれて、京都駅二月四日一〇時三十分発、浪速駅五日一時一分着、乗船とある。京都に集合し大阪から輸送船に乗ったのは泰次郎も同じであったと思われる。(JACAR Ref: C04122510100 陸軍省陸支密大日記S15-120-215)